

# 編集実行委員会便り

来日したアルファベット圏の友人と会食中、テーブル上の紙ナプキンをメモ用紙がわりに使って簡単な漢字を教えると、相手が感激した。文字どおり日本の字ではないのが残念だが、象形文字である漢字を、「日」、「川」、「山」と順次説明していき、「木」にいたる。その木が2本になると「林」になり、3本になると「森」になる。数多い漢字のなかでも、これほどわかりやすい成りたちの文字（語）は他に少ないだろう。日本語の林や森に対して、英語では、馴染みのあるwood(s)やforestのほか、grove, timber(land), wealdなどがあるようだが、筆者にはこれらの語句の差異が明確にはわかっていない。

また、筆者のような50代で田舎育ちの人間には、森といえども「トトロの森」（宮崎駿監督の映画「となりのトトロ」、昭和63年）のような里山が思い浮かぶ。東日本大震災後に日本人の心の原点として繰り返し歌われてきた「ふるさと」（長野県出身 高野辰之作詞、大正3年）に、大部分の日本人は里山の風景を重ねるに違いない。童謡「七つの子」（茨城県出身 野口雨情作詞、大正10年）には夕焼けに染まる里山が思い浮かぶ。

ここまでの2段落、いかにも素人っぽい導入で恐縮だが、事実、筆者は「森林」については素人なのでいかんともしがたい。そして筆者に限らず、当編集実行委員会では農林分野プロパーの委員が長期間不在になっていた。ために、今月号は、いわゆる低炭素社会<sup>1)</sup>がらみの「二酸化炭素吸収と植林（2003年3月号）」を除けば、「森林資源と環境（1991年11月号）」以来じつに20年ぶりの森林特集となった。おかげで、前述の里山は今や「SATOYAMA」と国際的に呼ばれることも筆者は学んだ。

本特集の企画にあたっては「エコ・フォレストイング」というキーワードで世界をまたにかけてご活躍中の柴田晋吾氏にご協力をお願いして、その全面的なご指導の下にこのようなすばらしい構成で実現できたものである。柴田氏、そして貴重な記事をご執筆いただいた著者の皆様には心からお礼申し上げる次第である。

本特集に付随して考えさせられたことがある。導入記事をご執筆いただいた月尾嘉男氏（東京大学名誉教授）から、以下のようなご連絡をいただいたのだ。「冒頭の氏名のローマ字表記ですが、政府はTSUKIO YoshioもしくはTsukio, Yoshioと表記することを推奨しています。Yoshio

Tsukioという表記は明治時代の過度の欧米崇拜から定着した悪習で、自国の伝統を冒瀆する行為です。ぜひ学会で再考していただきたいと思います。少なくとも、私の名前の表記はTSUKIO Yoshioにさせていただきたいと要望します。」言われてみると確かにわれわれの大部分は欧米様式にどっぷり浸かりながら、なんの疑問も感じずに暮らしている。国際的な場面ではやむを得ない（と思われる）ことも少なくないが、このご指摘は真剣に考え直すべきであると共感する。

関連してもう一件、別の学会であるが、清水昭比古氏（九州大学名誉教授）の数学連載記事のお世話をしたときに、以下のようなご連絡をいただいた。「文意に照らして、（連載の）2回以降、常用漢字にないという理由で文中の語を平仮名化することは極力避けて頂きたい。ルビはご自由をお願いします。それと大切なことは年号です。（中略）小生の定義による日本人とは、単にこの列島に現在生存する者ではなく『歴史の記憶と国語の感性を祖先と共有する者』であります。すなわち、先祖と会話ができてこそ日本人なのであります。元亀天正と聞けば『ご先祖はさぞ大変だったろうな』と思い、元禄と聞けば『俺も吉原や島原で遊びたかったな』と羨み、文化文政と聞けば『俺も水墨画の一つくらいは描いてみるか』と思う者が日本人であります。すなわち、年号そのものが日本人にとっては大切な文化である筈です。」

国際化、グローバル化、ボーダーレス化というかけ声の下で、われわれ日本人が捨てなくてもよい、あるいは捨ててはいけないことを安易に捨てていないだろうか、そして上記2件はその氷山の一角ではなからうか。深刻な反省を迫られた両氏からのご指摘であった。これを機に、これらのことを、本会にとどまらず、日本国民全員で考えていく動きを作りたいと願う。

最後にもう一度、漢字にもどろう。手元にあった漢和辞典の部首別のページ数を調べてみると、多い順に、「彳」、「人」、「木」、「艸」、「糸」であった。人間の営みは水と木と草を中心として関係を紡いできたといえようか。

吉田 英生

（「エネルギー・資源」編集実行委員長  
京都大学 大学院工学研究科 航空宇宙工学専攻）

E-mail: sakura@hideoyoshida.com（変更を思案するも  
@yoshidahideo.comは利用不可につき今後も継続使用:乞ご理解）

<sup>1)</sup>省エネルギーを目的とする文脈で使われるなら結構であるが、二酸化炭素がたか悪者であるかのようなふくみで使われることが多いこの言葉を、筆者自身はあまり好まない。